

幼稚園教諭免許状取得の特例講座を受講する保育士の保育者 効力感の特徴 — 領域「人間関係」の保育者効力感の観点から —

京林由季子* 中村光* 佐藤和順* 中野菜穂子* 池田隆英* 新山順子* 樟本千里

要旨 幼保連携型認定こども園への円滑な移行を進めるために、幼稚園教諭免許状及び保育士資格取得のための特例制度が実施されている。本研究では、保育教諭への対応のために特例制度を利用し幼稚園教諭免許状の取得を目指す保育士の保育者効力感について、保育内容の領域「人間関係」の保育者効力感に焦点を当てその特徴を検討した。特例講座を受講する保育士を対象とした、多次元「人間関係」保育者効力感尺度⁹⁾と関連変数からなる質問紙調査の結果、分析対象者の「人間関係」保育者効力感は総じて高く、「保育職の適性感」及び「社会的役割の確認」、「関心の強さ」、「充実感・満足感の予期」との関連が認められた。また、「人間関係」保育者効力感「初任者」「中堅者」「熟練者」の順に得点が高くなっていて、保育経験年数による群間の差は認められなかった。従来の研究では「人間関係」保育者効力感と負の相関を示すとされる「困難性の認知」は、本研究では負の相関は得られず、逆に「初任者」「中堅者」「熟練者」の順に得点が高くなっていて、さらなる検証の必要性とともに、多様な保育ニーズを有する子どもの増加や認定こども園の保育活動への不安などが背景にあるものと考察され、今後の保育教諭の養成・研修の課題として示唆された。

キーワード：幼稚園教諭免許状、特例制度、保育教諭、領域「人間関係」、保育者効力感

1. 問題の所在

子ども・子育て関連3法（2012）に基づき、子ども・子育て支援新制度が開始され、2015年4月より新たな「幼保連携型認定こども園」制度が創設された。「幼保連携型認定こども園」における「保育教諭」は、幼稚園教諭免許と保育士資格の併有が原則とされているが、新たな「幼保連携型認定こども園」への円滑な移行を進めるため、同制度の施行後5年後までは、保育士資格又は幼稚園教諭免許状のいずれかを有していれば、実務経験を評価して、幼稚園教諭免許状又は保育士資格を取得するために必要な単位数の軽減が図られることとなっている（特例制度）。幼稚園教諭免許状と保育士資格を併有していない保育士を対象とした文部科学省他の調査⁵⁾によれば、この特例制度を利用したいとする者は、保育士で75.4%、幼稚園教諭で86.3%であり、各大学で特例制度に対応した講座が開設され受講生を受

け入れている。岡山県立大学保健福祉学部保健福祉学科子ども学専攻においても、幼稚園免許状・保育士資格の特例制度に応じた授業科目を指定し受講生を受け入れている。

このような、子ども・子育て支援新制度の下、幼保連携型認定こども園の数は2014年度の720園から、2015年度1930園、2016年度2785園と急増している。また、2014年には幼保連携型認定こども園の保育・教育の内容について、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が策定され、2017年には幼稚園教育要領、保育所保育指針との整合性に配慮して改訂⁷⁾が行われたところである。

幼保連携型認定こども園での保育は、多様な経験を有する園児や多様な生活形態の保護者を保育することになり、短時間園児と長時間園児の生活リズムの違い、指導計画や個別の配慮の複雑さなどの課題が指摘されている^{8) 13)}。そのため、幼保連携型

* 岡山県立大学保健福祉学部

認定こども園の保育教諭には、より複雑で多様な保育現場において、様々な役割を理解し、判断し、実践する力量が求められるといえよう。従って、保育士あるいは幼稚園教諭から保育教諭への移行を単なる幼保併有だけの問題と捉えるのではなく、保育教諭としての保育実践力をどのように育成していく必要があるのかを検討していく必要があるだろう。

しかしながら、幼保連携型認定こども園の保育教諭、あるいはその予定に向けて対応している保育者が、どのように自身の保育実践力を捉えているのか、どのようなことを自身の課題と捉えているのか、その意識に関する研究は非常に少ない。そこで本研究では、そのような保育者の意識について、保育者の効力感から接近を試みる。保育者効力感とは「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」²⁾であり、行動と直接的な関連があるとされている。そのため、保育者効力感を高めることは保育者の子どもを支援する能力の向上につながることで、多くの研究が行われている^{1) 14)}。本研究では、西山⁹⁾が作成した多次元「人間関係」保育者効力感尺度（以降、「人間関係」保育者効力感尺度）を使用する。これは、保育内容の領域の1つである「人間関係」に焦点化した保育者効力感尺度であり、「子どもの人とかかわる力の育ちに望ましい変化を与えることができる」という保育者の信念や実現可能性の認知を捉えるために作成された尺度である。領域「人間関係」のねらいや内容を示す具体的な保育行動を尋ねる質問項目から成り、信頼性、妥当性も検証されている。「人が社会の中で生きることの根底にあるのが人間関係であり、そういった意味で領域「人間関係」は基本的に重要である」⁶⁾と指摘されるように、「人間関係」保育者効力感とは、保育全般の質に大きく影響を与えるものと考えられる。

2. 目的

本研究では、保育教諭への対応のために特例制度を利用し、幼稚園教諭免許状の取得を目指す保育士の保育者効力感について、保育内容の領域「人間関係」の保育者効力感に焦点を当て、その特徴を明らかにすることを目的とする。

3. 方法

(1) 調査対象及び調査時期

幼稚園教諭免許状取得のために20xx年度及び20xy年度に岡山県立大学の科目等履修生として幼免特例講座を受講した保育士38名に無記名自記式の質問紙調査を実施した。

調査は、幼免特例講座受講時に調査用紙を配布し、データはすべて統計的に処理し個人を特定することはないことを書面及び口頭で伝え同意を得た上で回答を依頼し、後日回収した。

回収数は34名、回収率は89.5%であった。この内、後述の分析に必要な質問項目全てに回答のあった32名を分析対象とした。

実施時期は20xx年度、20xy年度とも12月～1月であった。

(2) 調査内容

調査は、フェイスシート及び幼免特例制度利用状況に関する質問項目と、多次元「人間関係」保育者効力感尺度及びその関連諸変数を用いて行った。

1) 多次元「人間関係」保育者効力感尺度

西山⁹⁾が作成した「人間関係」保育者効力感尺度は、「人とかかわる基盤をつくる」、「発達の視点で子どもの育ちを捉える」、「子ども同士の関係を育てる」、「基本的な生活習慣・態度を育てる」、「関係性の広がりを支える」の5つの下位尺度に各5項目、計25項目から構成されている。評定は、「非常に自信がある」「かなり自信がある」「やや自信がある」「どちらとも言えない」「やや自信がない」「かなり自信がない」「全く自信がない」の7段階で得点化した。

2) 関連諸変数

「人間関係」保育者効力感尺度に関連する変数として、先行研究^{9) 10) 12)}より以下の6変数9項目を抜粋して付加した。

- ・「困難性の認知」1項目（子どもの人とかかわる力を育てることは難しいと思う）
- ・「関心」1項目（子どもの人とかかわる力を育てるために保育者として関心がある）
- ・「現在の保育実践」1項目（子どもの人とかかわる力を育てるために今何かしている）
- ・「保育職の適正」2項目（保育という職業は自分の適性に合っている／保育という職業で自分の能力を活かすことができる）
- ・「保育職の充実感・満足感」2項目（保育という職業によって充実感を得ている／保育という職業に

よって満足感を得ている)

- ・「社会的役割の確認」2項目（私は社会の役に立っている／私は周りの人から認められている）

4. 結果

(1) 回答者の属性及び特例制度の利用状況

分析対象となった回答者32名は全員女性で、保育経験年数は「10～20年」が17名と最も多く、次いで「5年～10年」が8名、「5年未満」が5名、「20年以上」が2名であった(表1)。また、25名(78.1%)が「正規職員」であった。

受講の動機(複数回答)は、「自分で必要を感じた」(52.9%)が最も多く、次いで「上司の指示」(34.4%)、「所属園が認定こども園に移行のため」(31.3%)、「以前より幼免取得を希望」(28.1%)となっていた(図1)。通学課程を選択した理由は、69.2%が「自宅で勉強時間を確保することが難しい」ことを挙げており、本学での受講理由は、「園に配布の本学の案内を見て」が最も多く(47.1%)、次いで「出身大学のため」(38.2%)であった。

受講に際しての勤務園からの配慮については64.7%が「ある」と回答しており、具体例としては、「有給休暇取得への配慮」、「当番などの勤務の配慮や変更」、「特例指定科目受講の承諾」、「人員配置」「出勤扱い」、「組合からの助成」などであった。

表1 保育経験年数

保育経験年数	人	%
5年未満	5	15.6
5～10年	8	25.0
10～20年	17	53.1
20年以上	2	6.3
	32	100.0

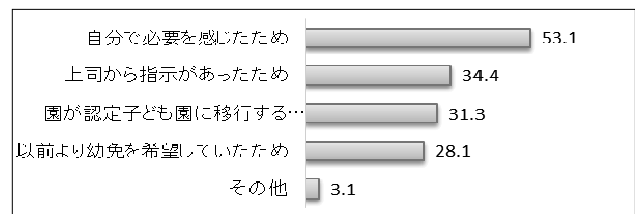


図1 受講動機

表2 認定こども園に移行した場合に不安に思うこと

カテゴリー	記述数	具体的記述例
保育内容	11	<ul style="list-style-type: none"> ・入園の子どもが、昼で降園する子、1日いる子とバラバラの時間になった時の保育内容や、時間のつなぎ方が難しくなるのではないかと不安。 ・短時間保育と長時間保育の子どもと一緒に生活をするので、午後からも運動会、発表会等行事の練習をしたり、年長児ならば午後からも様々な課外活動もある為、経験できる子とそうでない子が出てくることについて不安に思う。 ・保育内容・・・書類関係の変更かき方。具体的、かき方の様式・書式、研修など、早く知りたい。 ・短時間で帰る子どもへの配慮(午後からの活動、行事への参加、不参加)
保護者対応	4	<ul style="list-style-type: none"> ・認定こども園について自分では理解しているつもりだが、保護者から問われた時にうまく説明できるか心配。 ・体制が整うまで、保護者対応に追われそう。
教育観	3	<ul style="list-style-type: none"> ・保育園と幼稚園との交流をした時に、子ども同志の異和感や、保育士と教諭との意見・考え方の違いが出ないか。 ・子どもの育ちについて、考え方が違うのでは?保育士が大切に育てたいことと、教諭が教えたいことの違いがあると思う。
勤務条件	3	<ul style="list-style-type: none"> ・勤務条件がどのようになっていくのか心配である。(子育てをしているので、子どもに負担がいくのではないかと不安である。) ・勤務体制が変われば、自分自身(家族)の生活リズムが変わるので、大変そう。

※自由記述の回答を内容のまとまりで文を区切り、似通った内容を整理して、見出しを付けカテゴリーに分類した。

認定こども園に移行した場合の不安については12名から自由記述による回答があった(表2)。最も多かったのは、保育時間の異なる子どもの保育のばらつきなどの「保育内容」に関すること(10名)、次いで、「保護者対応」(4名)、「教育観」、「勤務条件」が(3名)であった。

(2)「人間関係」保育者効力感と関連諸変数

「人間関係」保育者効力感尺度の下位尺度と総得点の平均値及び標準偏差を表3の上欄に示す。また、関連諸変数との相関係数を同表下欄に示す。

「人間関係」保育者効力感尺度の総得点の平均値は、128.22点であった。また、5つの下位尺度の平均値は、効力感の高い順に「人とかかわる基板をつくる」27.00点、「基本的な生活習慣・態度を育てる」26.81点、「子ども同士の関係を育てる」26.13点、「発達の視点で子どもを捉えかかわる」24.75点、「関係性の広がりを支える」23.53点であった。

関連諸変数との関係については、「保育職の適性感」、「社会的役割の確認」では、「人間関係」保育者効力感尺度との間にそれぞれ.70、.83 ($p<.01$)と強い正の相関が、「関心の強さ」、「充実感・満足感の予期」では、それぞれ.57、.55 ($p<.01$)と正の相関が認められた。「困難性の認知」は、「人間関係」保育者効力感尺度の下位尺度「発達の視点」との間のみ.36 ($p<.05$)という弱い正の相関が、「現在の保育実践」は、下位尺度の「関係性の広がりを支える」との間のみ.39 ($p<.05$)という弱い正の相関を得た。

(3) 保育経験年数との関連

保育経験年数によって「人間関係」保育者効力感及び関連諸変数に違いがあるかどうかを検討するため、保育者を「初任者：0～5年」「中堅者：5年～10年」「熟練者：10年以上」の3群に分けて群間の相違を分析した(表4、表5)。

「人間関係」保育者効力感尺度の総得点の平均値は、「初任者」120.20点「中堅者」125.13点「熟練者」131.63点と、保育経験年数に従い高くなっていったが、一要因分散分析の結果、保育経験年数による群間の有意差は認められなかった($F(2,29)=1.22$, n.s.)。また、5つの下位尺度すべてにおいても群間の有意差は認められなかった($F(2,29)=1.26, 1.50, .26, 1.07, 1.20$, n.s.)。

関連諸変数については、「困難性の認知」、「関心の強さ」、「社会的役割の確認」の平均値は、「初任

者」「中堅者」「熟練者」と漸増していたが、6つの関連諸変数すべてにおいて、保育経験年数による群間の有意差は認められなかった($F(2,29)=1.79, .50, 2.04, .95, 1.98, .11$, n.s.)。

考察

本研究は、保育教諭への対応のために特例制度を利用し、幼稚園教諭免許状の取得を目指す保育士の保育者効力感について、保育内容の領域「人間関係」の保育者効力感に焦点を当て、その特徴を検討した。

「人間関係」保育者効力感尺度を実施した結果、総得点は128.22点であり、領域「人間関係」に関わる保育者効力感は、先行研究^{10) 12)}よりも高い傾向にあった。本研究の分析対象者は、保育経験年数10年以上のベテランが約6割を占めており、子ども・子育て支援新制度がきっかけではあるが自らの意思で受講している者が多い。そのため、保育内容の実践力を有し、認定こども園移行後も保育教諭となり勤務を継続する意志を持つ、意欲の高い保育者が多いことが関係しているといえよう。加えて、通学課程の受講には、勤務時間や人員配置等の勤務園の配慮や家庭の協力等も関わってくるため、職場環境や家庭環境のよさなどの外的要因も保育者効力感の高さに影響を与えている可能性も考えられる。

関連諸変数については、「保育職の適性感」及び「社会的役割の確認」、「関心の強さ」、「充実感・満足感の予期」と「人間関係」保育者効力感の関連の強さが明らかとなった。「保育職の適性感」は「充実感・満足感の予期」といった将来の見通しや、「関心・興味」といった動機付け、さらに「継続の意思・重要性」に強い正の影響を与えることが従来の研究¹¹⁾で示されているが、本研究もこれを概ね支持するものといえる。保育者効力感の向上を意識した働きかけとして、「保育職の適性感」などの変数への教育的働きかけが様々な機会を捉え行われることが有効と考えられる。

一方、従来の研究⁹⁾では「人間関係」保育者効力感と負の相関を示すとされる「困難性の認知」は、本研究では負の相関は得られず、逆に下位尺度「発達の視点」と弱い正の相関を示していた。また、保育経験年数との関係でも「熟練者」で最も得点が高くなっていた。ベテランの保育者が多く、「人間関係」保育者効力感も高い本研究の分析対象者におい

表3 「人間関係」保育者効力感尺度の得点及び各変数との相関

	人とかかわる 基盤をつくる	発達の視点で 子どもを捉え かかわる	子ども同士の 関係を育てる	基本的な生活 習慣・態度を 育てる	関係性の広が りを支える	総得点
平均値	27.00	24.75	26.13	26.81	23.53	128.22
標準偏差	3.63	3.96	3.28	2.92	4.13	16.07
困難性の認知	.23	.36*	.15	.31	.01	.24
関心の強さ	.50**	.46**	.59**	.52**	.47**	.57**
現在の保育実践	.16	.32	.14	.21	.39*	.31
保育職の適正感	.64**	.56**	.65**	.52**	.60**	.70**
充実感・満足感の予期	.45**	.47**	.50**	.36*	.44*	.55**
社会的役割の認識	.71**	.70**	.69**	.50**	.83**	.78**

表4 保育経験別の下位尺度の得点

	初任者 n=5		中堅者 n=8		熟練者 n=19	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
人とかかわる基盤をつくる	25.20	4.66	26.25	3.58	27.79	3.33
発達の視点で子どもを捉えかかわる	22.40	4.22	24.13	5.30	25.63	3.10
子ども同士の関係を育てる	25.80	4.66	25.50	4.04	26.47	2.65
基本的な生活習慣・態度を育てる	25.60	4.39	26.13	2.90	27.42	2.48
関係性の広がりを支える	21.20	3.35	23.13	5.60	24.32	3.53
総得点	120.20	19.49	125.13	20.21	131.63	12.92

表5 保育経験別の関連変数の得点

	初任者 n=5		中堅者 n=8		熟練者 n=19	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
困難性の認知	4.00	1.58	4.75	1.58	5.32	1.34
関心の強さ	5.40	1.14	5.63	1.06	5.89	1.05
現在の保育実践	4.00	0.71	5.00	1.07	4.68	0.82
保育職の適性感	10.40	1.52	9.25	2.49	10.42	2.01
充実感・満足感の予期	10.60	1.34	9.13	3.44	11.00	1.76
社会的役割の確認	9.00	1.58	9.37	2.26	9.47	1.98

て、子どもの人とかかわる力を育てるために“子どもの人間関係の発達に応じてかかわること”“保育の展開と人間関係の育ちを結び付けて捉えること”などに“自信がある”と回答することと、“子どもの人とかかわる力を育てることは難しい”に“そう思う”と回答することは、一見矛盾することのように考えられる。本研究では調査対象数の制約もあり断定はできないが、「人間関係」保育者効力感が高

くても保育実践における困難さの認知が低くならなかった背景には、保育を取り巻く環境のめまぐるしい変化があるのではないかと考えられる。近年、発達障害や虐待、愛着、貧困などの多様な保育ニーズを有する子どもたちが増えているが、「熟練群」の方がこの変化を実感しやすく、子どもの人とかかわる力を育む実践を意識的に行っているものの、それを育むことは容易ではないと感じているのではない

だろうか。また、本研究でも認定こども園への移行の不安として示されているように、保育時間の異なる子どもの保育のばらつきなどの「保育内容」や、保育と教育の「教育観」の違いへの対応などを、これからの保育実践の変化として不安を感じているのではないだろうか。このような保育者が感じている困難さは、保育者効力感と保育実践にずれが生じているものと考えられ、保育教諭の養成だけでなく、現職研修の課題としても示唆されるものである。

今後は、調査対象数を増やし、幼保連携型認定こども園の保育教諭の保育者効力感の構造や関連変数について検証していく必要がある。また、保育の質を高めていく上で、保育教諭の養成教育や現職研修における保育者効力感の向上を意識した教育的働きかけの内容や方法についても実証的検証が必要となろう。

付記

本研究の実施にあたり、調査にご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、平成27年度独創的研究助成費の助成を受けたものである。

文献

- 1) 笠原正洋、吉川寿美、山崎篤 (2017). 保育内容「人間関係」の授業に人間関係をとらえる活動の枠組みモデルを導入した短期縦断研究. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 49: 1-11.
- 2) 三木知子、桜井茂男 (1998). 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響. 教育心理学研究 46 (2): 203-211.
- 3) 三宅幹子 (2005). 保育者効力感研究の外観. 福山大学人間文化部紀要 5: 31-38.
- 4) 文部科学省 (2013). 幼稚園教諭の普通免許状に係る所要資格の期限付き特例. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/1339596.htm
- 5) 文部科学省、厚生労働省 (2013). 幼稚園教諭免許状又は保育士資格の取得のための特例制度に関する利用希望調査の結果. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/1339929.htm
- 6) 無藤隆、岩立京子、赤石元子、他 (2008). 事例で学ぶ保育内容<領域>人間関係. 萌文書林.
- 7) 内閣府、文部科学省、厚生労働省 (2017). 平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 原本. チャイルド本社.
- 8) 西川ひろ子 (2013). 広島県における認定こども園の設置動機・教職員及び保護者の意識の変化と課題. 安田女子大学紀要 41: 227-235.
- 9) 西山修 (2006). 幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成. 保育学研究、44 (2): 246-256.
- 10) 西山修 (2008). 保育者のアイデンティティと効力感は保育実践に影響を及ぼすか—領域「人間関係」について—. 乳幼児教育学研究、17: 19-28.
- 11) 西山修 (2012). 領域「人間関係」に関わる保育者支援プログラムの集団実施による効果. 応用教育心理学研究 28 (2):
- 12) 西山修 (2013). 免許状更新講習における保育者支援プログラムの簡易実施とその効果. 応用教育心理学研究、30 (2): 3-13.
- 13) 下里里枝、石野秀明 (2014) 保育者は幼保一体化のメリットとデメリットをいかに意識しているか: 全国の認定こども園に対する調査の基礎的な分析. 兵庫教育大学学校教育研究センター紀要 26: 7-16.
- 14) 田頭伸子 (2016). 保育者効力感の発達的变化について: 保育専攻短大生と保育者の比較. 広島文化学園短期大学紀要 (49): 29-33.

A study on Child Care Workers' Efficacy in a Course for Teachers Licenses :

YUKIKO KYOUBAYASHI*, **HIKARU NAKAMURA***,
KAZUYUKI SATO*, **NAOKO NAKANO***, **TAKAHIDE IKEDA***,
JYUNKO NIIYAMA*, **CHISATO KUSUMOTO***

**Department of Health and Welfare Science, Okayama Prefecture University*

Keywords : Kindergarten teacher's license, Exception System, Childcare teacher, Childcare Contents “Human Relations”, Child Care Workers' Efficacy